

看護学科 4 年次専門科目「研究方法論」への参加 (情報教育支援の実践報告)

渡辺真希子, 登坂善四郎 横浜市立大学医学情報センター

本発表は、横浜市立大学医学情報センター（以下、医学情報センター）で、2008 年から開始した看護学科 4 年次の卒業研究指導への参加報告である。報告の目的は、2 年間の本取組み内容を紹介するとともに、図書館における医学分野の情報教育支援の効果について考察することである。初めに、授業開始から 2 年間の授業内容について報告を行なう。次いで、教員及び学生から得られた授業への感想と、データベースの利用状況やレファレンスカウンターでの質問など利用実態をもとに支援に対する分析を行なった。最後に、図書館における情報教育支援の役割と効果について考察する。

取組みの背景は、看護学科が短大から 4 年生学科への昇格に伴い、2008 年から卒業研究が必修となった。これにより看護学科 4 年生は、文献検索の技術と、論文執筆に必要な知識が必要となった。医学情報センターでは、前年、担当教員から看護系学術資料の拡充などの依頼を受けていたこともあり、それと平行して、文献検索に関する意見交換を行っていた。結果的に、このことが、この支援を開始する契機となった。

授業は、論文作成の概要と学術情報の仕組みについて（約 20 分）、検索演習（約 60 分）、文献の入手から管理、文献利用のルールについて（約 10 分）で構成する 90 分である。なお、授業構成は、受講者からの意見を参考に、2009 年に一部変更を加えた。

分析は、教員及び学生の声については、2008 年の授業に関する自由回答と 2009 年の授業に関する質問紙の結果（学生のみ）を、図書館サービスについては、ILL 複写依頼統計と医中誌 Web 利用統計等を使用した。その結果、授業の感想として、「文献の基礎知識が広がった」、「インターネットからの情報を安易に信用してはならないと思った」、「検索から管理まで一連の流れで、文献の扱い方を知ることができた」、「シソーラスを用いた文献検索ができるようになった」、「PubMed、CINAHL などの演習もしてほしい」（教員・学生）、「早い段階から文献検索を必要とするような講義・演習の必要性を実感した」（教員）などの声が複数あった。また、図書館利用では、看護系文献の複写依頼の増加、医中誌 Web のアクセス数増加などに変化が見られた。レファレンスカウンターでは、授業終了後、内容に付随した質問が増加した。

これらの取組みから、次の点に一定の効果があったと考えられる。1. 学生の図書館利用では、雑誌の返却期限や使用文献の種類に変化をもたらした、2. 教員の情報教育に対する意識に変化をもたらした、ことである。卒業後、臨床等で看護研究等を必要とする学生にとって、文献検索や学術情報に関する技術や知識は重要である。また、情報系科目の少ない医学・看護学生にとって、情報教育を支援することは、図書館にとって重要な役割である。今後は、授業内容の改善を図ると同時に、図書館サービスとしての情報教育支援について、更に検討をおこなっていきたい。